「リウマチ手記」 国分 好子 62歳

2011年6月11日

「2007年」

2007年5月にリュウマチという診断が出されて初めてリウマチ薬のアザルフィジンをのみ始めました。しかし振り返ってみると、リウマチと思われる症状は私の場合20年位かけて色々な形で（五十肩、顎関節症、足首の腫れ、足親指や小指の付け根の腫れ、膝に水が溜まる、バネ指は親指から始まって小指へ移動していきました）表れては消え、それらは一年位で何となく治まったようにみえました。それは新しく痛い所が出現するとそれまでの痛かった所が二番手に回って何となく紛れてしまったようです。体のどこかここか常に痛い所があっても、体がだる重くて元気がでなくても、もう年もなんだから、とか湿布を貼っていればそのうち何とかなるさと思いながら暮らしていました。

そんな繰り返しの毎日を過ごしているうちに、楽しみにしていた山歩きやスキーはだんだん出来なくなっていきました。足首の腫れと痛みでスキー靴どころか普段の靴さえ履けなくなりました。それでも足を引きずり、痛い所をかばいながらも普段の生活を維持しようと必死でした。しかしある日右足がさらに腫れ上がり、かかとも痛くて床に足を着けることも出来ません。さらに左肩と腕の痛みで手が上がらなくなり、まずは整形外科にかかりました。その時は車のシフトレバーを握ることも出来ず、振り向くことも出来なくなり車の運転をあきらめました。パート勤めも辞めました。

何でこんなことになってしまったのだろうか？すぐに誰かに何とかしてもらいたい、何で？何で？と混乱し不安で頭はパニックでした。

心配する家族の勧めでリウマチの専門医として地元で評判のクリニックに予約を入れて一ヶ月待つて診察を受けました。予約制なのに待合室には車椅子の人や付き添いの人やたくさんの方が待っていて、どんな名医なのだろうと期待しました。

その医師は優しく話をきいてくれて整形外科で出されたアザルフィジンを引き続きのみながら「詳しく調べてみましょう」と検査の日時を言っただけで何もしてくれませんでした。専門医なのだからすぐに何とかしてくれると思っていたので拍子抜けしました。が後になって考えれば、すぐにステロイドを使う医師でなかったことが救いでした。今思えば、あきれるほど自分の病気に無知で

あったことを痛感し、また人任せでした。当時の私は病気になったら病院に行き薬で治してもらおう、ということに少しも疑いを持つこともなく生きてきました。しかもその効果がすぐに分かることを当たり前のように思って病院にかかっていました。すべてのことに早く早くと、なぜかとてもせっかちでした。そんな自分だからこそリウマチが出てきて私にそのままでもいいのかい？と問いかけてくれていたことに気がつきませんでした。

夫が買ってきてくれたリウマチの本を読んでも、治療の項目にリウマチの原因が分からない現在、根本的な治療法はありません、と書いてありました。つまり「治らない」ということですよねショックでした。治らない病気ならこのまま動けない体になっていってしまうのだろうか、とつかみどころのない不安と絶望感でどうしたらいいのか、訳が分からないまま、処方されたメトレートとアザルフィジンをのんでいました。

「2008年」

処方された薬をのみながら、良くなっているという感触がないまま一進一退を繰り返しながら一年が過ぎました。クリニックの医師は薬の種類、その量、レントゲン、エコー検査などを受けるかどうか私に訊いてきました。

またある時は軽い感じで治験を勧められたこともありました。その時は受けませんでした。後になってぞっとしました。私の手指の第二関節と第一関節の何本かがブス色に腫れあがった時は痛くて辛いのに「へーこれはすごいね、第二関節はリウマチだけどこっちの方はただの関節炎だね」とおもしろそうに写真に撮られました。やっぱり医者にとって患者はモルモットなのか、と思いました。リウマチの専門医として評判をとっている医師の姿に疑問を感じました。クリニックで診察を受ける度に感じる手応えのなさには不安が増すばかり、薬で治せない病気なのにいつまで続けるのだろうと自分に問いかけながらも、止めてどうするか答えも見つからないまま症状の辛さに振り回されていて、選択肢などありませんでした。

「2009年」

追い討ちをかけるように、この年の4月に大腸がんの手術を受けることになりました。手術の前後にはリウマチ薬を休止しましたが、その時のリウマチの具合がどうだったかを覚えていません。手術後、抗がん剤の投与も受けることになり、その副作用で生きた心地がしない辛い日々の全行程6ヶ月のうち5ヶ月目あたりから血液検査での肝臓の数値がはね上がったために抗がん剤の投与を続けられなくなり途中で中止しました。

当時は週に一度点滴を受けるのに通院していました。その副作用に耐えることにとっても嫌悪感があり、体はそれをはね返そうとする力があるのに無理やりねじ伏せられている感覚でした。明日は病院に行く日だと思うだけで吐き気がしました。いやでいやでたまらないその気持ちが自分の肝臓で拒否の意を表明したのかな、と感じました。結果、副作用から開放され、抗がん剤で徹底的に免疫を抑えたせいも、何とリウマチの症状も軽くなりその時は、治った！と思うくらいに楽になりました。実際にこの年の冬には何度もスキーを楽しめましたし、あのリウマチの辛さは一体どこへいったの？というくらいでした。しかし、このままで済むはずはないぞ、と思いながらも一息ついた気がしました。

「2010年」

リュウマチ薬を再開してもいい時期がきても、のみたくないし、のまないでいたらどうなるんだろうと過ごしているうちに案の定、抗がん剤を終えて半年が過ぎる頃、私のリュウマチはパワーアップして再登場してきました。今度は全身に一度に症状が出てこれまでになく辛くて、じっと耐えることに疲れ果てていきました。左膝は続けて2回水を抜くことになりました。

その時医師に「ステロイドを使ってこの辛い状況から一度、抜け出しましょう」と言われた時は迷うことなく「お願いします」と返事をしていました。

膝の水を抜いた時にケナコルトを注射しました。すると効果テキメンで翌日には楽になっていました。驚きと共にやはりこれは麻薬である、と悟りました。

しかし今回のステロイドは自分で決めたことです。医者姿勢には失望していたけれど、究極の辛い状況に陥ればやっぱりその麻薬に頼ってしまう弱い心の自分を思うと医者だけを責めることはできない、と思いました。そして自分の病気にどう向き合っていくのかを考えることこそが大切なことなのだ、と思いました。しかし、リュウマチの本に書いてあったようにどの薬もいずれ効かなくなるのが分かっているのに、それをのみ続けることしかない違和感と不安で途方にくれていた時に、まさに天の助けか私に松本医院の存在を知らせてくれる人にめぐり合うことができたのです。ステロイドを使わずにリュウマチを治す医者がある、というのです。「え！本当に？治せるものなの？どうやって？」と一刻も早く知りたくて家に帰ってすぐにネットで松本医院を検索しました。

まずは松本先生の論文「リュウマチの完治の理論と証拠」をはやる気持ちで読みました。何度も読むうちにリュウマチの抗体であるIgGがIgEにクラススイッチされてアトピーとなり、自然後天的免疫寛容を起こすことにより治すことができる。そのためには正しい免疫の働きを抑制したり止めてはならない。

と書いてありました。専門的な言葉や医学用語はよく分かりませんがそれでも、

リウマチを治す道筋は見えました。「これだ！」という直感がありました。すぐに松本先生に会いに行かなくちゃ、と思いましたが松本医院は高槻市にあり、私は遠く北海道の人間です。通えるかとか、続けられるかとか何も考えずにとにかく一度先生にお目にかかりたい一心で、藁にもすがる思いで夫と共に、10月1日に受診することが出来ました。

その翌日からは懸命に、指示通りに毎朝煎じ作りをすること、薬草のお風呂に入ること、鍼灸に通うこと、その何もかもが初めてづくしのことに戸惑いながらも、免疫を上げてリウマチを完治させるための第一歩を踏み出しました。

松本先生のおかげで、東洋医学にふれていくうちに自分はどうして病気になったのか、体は部品の寄せ集めではなくそのすべてが深く関わりながら、一体となって働いてくれていること、自然治癒力は誰もが持っているものでその免疫を抑えることなく高めていくことにより、病気を治す。つまりそれは先生のお言葉の「治らない病気はない」「自分の正しい免疫が病気を治す」という考え方に「なあーんだ、そうか、そういうことだったのか」とまるで初めて知ったように新鮮で単純明快でパズルが解けたように納得のいくものでした。

そのことが分かった時自分の病気の正体が見えました。こんなにも私の免疫は頑張っていてくれていたのだ、それに気づかずにいてごめんね、と言い又自分の体を初めて愛しく感じました。そして心が平らかになりました。

今までの漠然とした様々な疑問や不安な気持ちは一体どこからきたのだろうか？と考えたときに、西洋医学では症状にだけ対応するが、病気になった根本の部分には触れないというか興味を示さないのだ、それ故に病気を治すことが出来ないのだ、と思い至りました。

これまでに気づかずに過ごしてしまった多くの時間を残念に思います。

「2011年」

現在の体調は全体的には8割方の回復を感じています。手のほうは起床時のこわばりなどあり、すぐには思うように動きませんが、ゆっくりと煎じの用意をしたり、朝食をこしらえているうちに普通の家事はこなせるようになります。自転車で遠くのスーパーにも行けます。調子の良い時は正座も出来るようになりました。仕方なくリウマチ薬をのみながら出口を探して、光を求めて手探りで歩いていたあの日々を思うたびに、夢のように「今日のこの日が信じられないね！」「松本先生のおかげだね！」と夫と共に心から感謝し、喜び合っています。たくさんの方々の手記を読ませていただきました。症状や回復への道のりは様々で、どの方も読んでいて胸が痛くなるような、大変な困難にもめげず、松本先生を信じて取り組んでこられ、そして乗り越えてこられた末の喜びの言

薬には心から共感し、私もがんばろうとの思いを強くします。

私の場合、松本理論に出会ってからわずか八ヶ月でここまで良くなりました。それはステロイドで最悪の状態になる前に、早い段階で松本先生に出会えた幸運であった、と思います。松本理論を信じる、自分の免疫を信じる、自分が作った病気は自分にしか治せないんだという気の持ち方は毎日の励みになります。しかし体調の波にもまれながら調子が良い時はただうれしくて、悪い時は自分の免疫ががんばっているのだな、と思って無理をせずに余計な心配はしません。松本先生がいつもおっしゃる「リウマチは100%治るで!」「自分の免疫が治すんや!」のお言葉にいつも励まされ、安心します。

アトピーは最初は主に下半身にたくさん出ました。それが調子の波を繰り返しながら数ヶ月経つうちにだんだん治まっていくとともに足の状態が良くなっていることに気がつきました。最近はそれが上半身に移っています。お灸は痛い所はどこでもいいからやりなさい、というので手が届くかぎりやっています。背中鍼灸師さんにやってもらっています。薬草風呂はお湯が柔らかくて本当に気持ち良くいつまでも入っていられそうです。

朝は煎じ作りから始まり、

昼間はお灸をし、夜には薬草風呂とすっかり生活習慣になりました。

しかしまだ回復途上であるのにこれを読んでいただくのは時期尚早かと思いましたが、先生のおかげでここまでこられたことを心から感謝する気持ちと、これまでの心と体の軌跡を喜びをもってお伝えしたくて書かせていただきました。

松本先生、本当にありがとうございました。

そして完治を報告できるその日までこれからも宜しく願いいたします。